



## コラム 花と虫と子どもと未来

### 3 森ではこうなっている!

～森の案内人が探る花壇の原型～

#### 「森」と「花壇」はつながっている

「森」と「花壇」、それってどうつながるの?と思われる方も多いかもしれません。でも、いつも森を歩いている僕からすると、森は花壇であり、花壇は森を小さくギュッと表したものだと言えると思っています。

まず、森では、日常的に上から葉や枝が落ちてきています。森の地面はそのような植物遺体（一部動物の糞や昆虫の死骸など）が積み重なってできています。このことは、ポールさんが、花壇を作る際に示してくれたハンバーガー工法（2025年9月号参照）を思い出させます。なので、森の地面の表層は、落ちてきた葉や枝や果実や花そして倒木などの植物遺体、細かく見れば動物の糞や昆虫の死骸などでびっしりと覆われています。それらは、やがてミミズやヤスデなどの小さな生き物や真菌などにより細かく分解されてゆきます。表層の落ち葉などを丁寧に剥がすと、皆さんがいわゆる「腐葉土」と呼ぶような層になります。そこも剥がしてゆくとその下は、皆さんがいわゆる「土」と呼んでいる層になります。そう、森ではヒトが堆肥場で土づくりをしなくとも、多様な命のつながりの中で、日々自ずと土がつくられているのです。

#### 森から学ぶ花壇作りのコツ

実際、僕がメインフィールドにしている八ヶ岳南麓の森では、写真のような大きな岩の上に、植物が豊かに生えているのを見ることができます。これは、まるでコンクリート化された園庭に生態系を再生するお手本のようです。たとえ岩やコンクリートの上であっても、植物遺体を積み重ねれば、そこは花壇になるのだということを私たちに示してくれています。この写真では、岩の上部が凹んでいます。そこに植物遺体が自然と溜まり、それが分解されて植物を生かせるベッドが整ったところに、種子が落ちたり運ばれたりして、気が付けば豊かな花壇のようになっているのです。この写真の花壇のような岩の凹みには、大きく分けて3種類の木の幼樹が見られます。1つは高く育つ木。もう1つは高い木の下で低く生きてゆく木。そして、絡まりながら生きてゆく蔓性の木です。そして草の仲間は多年性のものばかり。これもポールさんが提案してくれている、多年性の草を生かしながら低木や蔓性の樹木をうまく取り入れて花壇を作ってみては?という提案を思い出させます。

おわかりでしょうか? ポールさんや僕が考えているのは、花壇の原型は森にあるということなのです。この国の国土のほとんどは、ヒトの営みが行われないといすれ森になってしまうような環境にあります。ですから、私たちは森の成り立ちや営みから大いに学ぶことができます。小さくギュッと森をつくることが、すてきな花壇を作るコツなのだということです。一度コツさえつかんでしまえば、たくさん買い物をして花壇を作るよりも、よほどスムーズでワクワク楽しいと感じるでしょう!

もし、コンクリートやカチカチに固まった地面の上に、豊かですてきな庭（生態系）を再生したい!と本気で思われるなら、本や動画で学ぶ前にまずは森に出かけて、岩の上にできたすてきな庭にたくさん出合ってみてください。

